

2021年(令和3年)1月11日(月曜日)

壹

壹

衆

第

地盤改良技術 本に

松阪市飯高町の「尾鍋組」社長尾鍋哲也さん(58)が、「住宅地盤インベシジョン」(四六判188頁、合同プレス)を出版した。社長以下15人の小さな小さな建設会社が、試行錯誤の末に独自の地盤改良技術を三重大学と共同開発し、全国で施工実績約2万件を数えるまでに育てた、17年間の奮闘の記録だ。

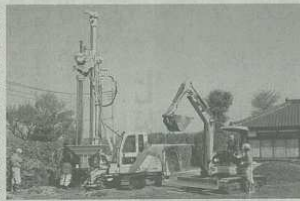
松阪の社長が出版

きっかけは、2003年に届いた一通のダイレクトメールだった。差出人は新潟県の地盤改良会社。代理店を募集する内容だったが、「事業の構造改革はお済みですか？」のキヤッチコピーに目を奪われた。



独自の地盤改良をつづった著書を手にする尾鍋社長

エコな工法 三重大と開発



砕石を使った「エコ工法」による地盤改良工事

父親らの反対を押し切って代理店契約を結んだ。ところが、新潟の会社は3年で倒産、尾鍋組はパートナーを失った。重機の購入などにかかった約1億円は未回収で、やめれば借金だけが残る。悩んだ末、尾鍋さんは自力で地盤改良を続ける道を選んだ。

め環境に優しく、土地の価値も低下させないという利点がある。その反面、施工に熟練を要し、手間もコストもかかるという課題があった。収益を上げ、事業として継続するには課題を克服するしかない。だが、尾鍋さんには自力で改良する専門知識も人脈も、開発資金もなかった。何度も壁にぶつかり、くじけそうになったが、三重大学の酒井俊典教授(土質力学)ら協力者との偶然の出会いがあり、道が開けたという。地盤改良機の1号機は09年3月、完成した。尾鍋さんのアイデアを形に、課題を解決したもので、5件の特許も取得。「エコ工法」と名付けて全国展開を図った結果、施工実績は昨年末に約2万件を突破した。尾鍋さんは「自叙伝でも成功本でもなく、環境や土地の価値に与える影響が少ない地盤改良工法があることを一人でも多くの人に知ってほしくて本にした。知名度はまだまだ低く、全施工件数の2割程度だが、将来は20%くらいまで引き上げたいと夢を語る。「住宅地盤インベシジョン」は、主な書店のほかネット通販サイト「アマゾン」でも販売中。1500円(税別)。